

# 徳島城下における「溢れ者」の横行とその対策

—『異事旧記』を素材として—

三 好 昭 一 郎

## 〔抄 録〕

本論の史料として使用した「異事旧記」は、小杉楹邨編の『阿波国徴古雑抄』に集載されたもので、徳島藩の慶安～元文期約九十年間における藩士に関わる喧嘩口論や無礼討ちなど、七十五件の異変を選び編集した記録で、純然たる「溢れ者」の事例は二件を挙げるに過ぎない。しかし他の大半の事例も藩初特有の藩政下に生じた現象で、「溢れ者」を輩出する武家風俗として注目すべきであろう。元和～慶安期の徳島藩では軍事体制優先の藩政機構から経済優先の官僚機構に移行する初期藩政改革下にあった。この初期改革は相対的に中下層家臣の城下における地位を低下させたが、それに対する不満を行動に表現しようとするものであり、いま一つは参勤交代の制度化で、江戸詰めする若い家臣が江戸市中を横行する旗本奴の風俗を真似たという一面もあった。『異事旧記』では寛文・延宝期の「溢れ者」の事例に取り上げる熊谷馬左衛門は、城下の助任橋の擬宝珠を持ち帰ったり、宴席で拔刀し

て乱舞するなどの行為を「殊外溢者」と記している。既に藩は寛永期から旗本奴を真似るような行為を禁じる御触書を出して取締ったが、一向に効果を挙げられなかっただけでなく、「溢れ者」は増加の一途を辿ったものと考えられるが延宝期、つまり藩体制が確立する段階になると取締りも本格化し、馬左衛門には「大成溢段々相顕れ、切腹被仰付、親権左衛門御暇付候」と厳科を課し、つづいて「右類様之者有之候得共、何之被仰出も無之、其後溢自然と相止申候」と記されているように、馬左衛門を「溢れ者」に対するターゲットとしていたものと考えられる。その後も溢現象は絶えなかったが、元禄期に至って藩では、溢れ行為に対し「元禄年中御改有之穢多末下二御付ナサレ候由」とするようになると、やっと終焉を迎えることになった。この段階をもって徳島藩の支配体制が確立したと考えることもできるだろう。

その後は元禄期にかけて藍経済の発展と徳島城下町の整備がす

すむが、正徳・享保期に藍の商況が停滞期を迎えるにつれて、武家に対する下層町人の無礼な行為が多発し、藩もその取締りに取り組まなくてはならなくなってくる。こうした下層町人の振舞いは「溢れ者」の町人社会に対する転移現象ともいえるだろうが、いずれにしても「溢れ者」輩出の背景を明らかにすることは、今

## はじめに

徳島城下の夏を彩る盆踊は、阿波最大のイベントであり、また最高の楽みとして今日にも継承されている。ところで藩の盆踊規制は踊る主体の町人よりも武家に取締りのウエイトが置かれていたと考えられる。本稿はその理由を少しでも明らかにしてみたい。そうしたところに執筆の動機がある。

徳島藩は立藩以来阿波国九か所の要地に支城を置いていた。その阿波九城<sup>1)</sup>が慶長二十年(一六一五)に幕府の一国一城令で、他の西国諸藩同様に破却されることとなった。当然支城に駐留させていた兵員約三千を徳島城下に移住させるため、城下の再開発に着手し寛永十二年(一六三五)再度の一国一城令がでるまでの間に、ほぼ城下の整備を完了した。それと併行して二代藩主蜂須賀忠英は、軍事優先の支配体制を経済重視の官僚機構に編成替えをし、寛文三年(一六六三)の寛文印知<sup>2)</sup>により三代の光隆は公儀から阿淡両国領知の御判物を得て、改めて幕藩制国家の一翼を担う地位を確定している。

後の重要課題であると認識している。

キーワード 徳島城下再編成、参勤交代制、初期藩政改革、衣料革命

この約半世紀の間に亘って、徳島城下を騒がせたのが溢れ者とよばれた一部家臣の横行である。溢れ者が輩出した背景は複雑多岐であるが、既に早期には関ヶ原の戦い直後から京都で流行した傾奇者の横暴で知られ、自らの不満を粉らわす反社会的行動である。また幕府の元和偃武の下で江戸における水野十郎左衛門などに代表される旗本奴の横行が、地方都市にも拡散したとかがえられる。これらの動向は必然的に慶安四年(一六五二)の有名な慶安事件<sup>3)</sup>という幕府転覆計画に連動する危険性を内包していた。もちろん旗本奴の横行などは幕府の支配体制が確立するまでの過渡的段階に生じた現象であった。

徳島城下でも藩政の転換に不満を抱く家臣たちの反抗姿勢が溢れ者の横行であるが、その動向を知る史料は少ない。そんな状況下で『異事旧記』の史料価値は高い。また藩による溢れ者対策を示す法令は、寛永九年(一六三二)のものが初出<sup>4)</sup>であろう。そのころ徳島藩では初期藩政改革によって、家臣各層も動揺していたことは確かであり、それは改革に取り組んだ諸藩の場合にも同様の現象がみられたものと考えられる。

溢れ者は徳島藩にとって実に厄介な存在ではあったが、四代綱通と五代綱矩の延宝期、つまり藩体制の確立期を迎えると城下から姿を消している。そこに藩の溢れ者対策が奏功したことを示す側面的史料はないが、ある意味では溢れ者が城下から姿を消した段階をもって、徳島藩政確立のメルクマールと考えることもできるだろう。藩は対策の一環として溢れ者に喧嘩口論を仕掛ける場になり易い、市中の盆踊から家臣を町人各層と分離した寛文十一年（一六七〇）の、武家禁足令を出した藩の政策上の意図についても、改めて考察を深化させる必要性があると思う。本稿では以上の視点から『異事旧記』の該当事象の分析から始めてみたい。

## 一、『異事旧記』にみる徳島城下の溢れ者

『異事旧記』は家臣による喧嘩沙汰や手討ちなど異常な行為について、慶安から元文頃まで約九十年間に及ぶ藩の裁判記録のうち、七十五の事例を選び編纂しているが、残念ながら選者は不明である。しかし、徳島藩の武家の動向や当時の世相・風俗を知る貴重な史料だが、これまでの利用は皆無であり、本稿は当史料利用の最初の試みとなる。ここに登場する武家のうち、城下の秩序を著しく混乱させたといわれる溢れ者とは、どのような行動パターンを示す武士であったのが、その史料を『異事旧記』から抽出して紹介してみよう。

一 光隆様御代、暫御滞府被遊御留主故、御山下廻り毎事溢者有之  
小目付伊賀其外忍目付昼罷出候節、堤清左衛門秦孫兵衛兩人

殊之外酒ニ酔、夏の夜の事故、新町橋迄涼ミ罷越、罷帰道筋下代町切麦や店ニ豆腐有之候得ハ、右兩人豆腐を抓喰候得ハ、亭主罷出候而、迷惑之由申候得ハ、価遣候へハ事足申義と申聞候而、往過候故、代銀催足申候節、路頭之大石を店へ投込罷帰候、此旨忍目付之者申上候哉、翌日上より仰出候ハ、昨夜ケ様成溢致候段不届に思召候、因茲御暇被遣候旨被仰出候由

伝日、因茲市中家中共、一時ニ溢者相止ミ候由、堤清左衛門ハ部屋住召出サレ居申候者之由、孫兵衛清左衛門秦藤兵衛ハ、兩人共富田北山路居住之由「寛永八辛未年ヨリ同十八辛巳年迄御在江戸ノ共ナルヘシ」

その付記にも堤と秦の兩人は寛永期に江戸詰を勤め、江戸市中における旗本奴の横行を見聞して影響を受け、城下で悪事を働いたものと考えられる。光隆が藩主のときだから、承応元年（一六五二）から寛文六年（一六六六）の間のことで、当時は徳島城下でもっとも多くの溢れ者が闊歩していたと考えられる。

次の事例は「熊谷馬左衛門切腹、親権左衛門御暇之事」として溢れの行状を記している。

一 馬左衛門ハ権左衛門嫡子ニ而、殊外溢者、或時ハ助任橋のぎはうしをはつし、茶湯風呂にいたし、又ハ、御堀の鮒鯉を取、客饗応し、或時ハ慈船寺境内池の鯉取候て、人々同道則寺ニおゐて致煮焼、又或日春日寺へ振舞に参り、若衆へ為土産大成黍草子を持参、一座へも振廻、若衆へ為客振脇指ヲ拔乱舞ニて大股を割石様候、大成溢段々相顕れ、切腹被仰付、親権左衛門御暇

被仰付候、右類様之者有之候得共、何之被仰出も無之、其後溢自然と相止申候

伝日、類葉ハ増田米庵、柿原間助、南山和尚ナトノ由也<sup>8)</sup>

熊谷家については「家臣成立書」がなく、系譜は不詳である。また増田家は藩医で知行高百五十石、柿原家も詳細不明ながら小奉行格で間助の代は三人扶持八石の輕輩である。縁辺の南山(一六二一―九二二)は城下富田の矢上氏の出、福島藩の臨濟宗慈光寺で香南から承応三年(一六六二)に印可を得、光隆の招きで臨江寺や慈光寺に住し、寛文三年(一六六三)本山の妙心寺に住して紫衣を賜り、その後慈光寺に帰住するが同七年に再び妙心寺に住した後慈光寺に帰るが、延宝五年(一六七七)衆に請われ「中峰広録」を提唱したときは数百人の雲水が当寺に雲集したという。また中田村(小松島市)の桂林寺や三好郡池田村の桂林寺を中興し、蔵本村(徳島市)の金蓮寺を開基した学徳兼備の高僧である。この南山が類葉ということは藩内によく知られた家柄であつただろう。

さて馬左衛門の溢れ者としての異常さは格別で、日常的な不満の鬱積からする行動か、あるいは流行の若者文化の発露であるのか、判断し難いが両方の側面を持った振舞いであろう。

もう一例として村瀬銀左衛門の所業として

御閉門年の事二候へハ、御山下廻り一丁々々二辻番相堅メ候処、或夜赤堀権三郎家頼町使二遣候所、広瀬嘉兵衛前二而二ツニ致成敗有之候、右両方辻番の者不存候ニ付、御家御触有之候へ共、切人相知れ不申、何れ云となく右様之手際ハ村瀬銀左衛門ニ而有之

由沙汰專二候へハ、上方銀左衛門御詮議被仰不候所、銀左衛門申ハ素方致慮外候得ハ、致成敗其旨早速可申上候へ共、全覚へ無御座候旨申上候而切人相知不申、然共右噂有之故、無其事平生不行跡之由二而御暇被遣候よし<sup>9)</sup>

ここに御閉門年とは二代藩主忠英死後の承応元年四月から翌三年四月の間で、当然市中に鳴物停止が触れられ、家臣は厳しい服忌が命じられていたときである。日ごろ銀左衛門は力自慢で夜相撲に出たり市中徘徊が知れ渡っていたらしく、溢れ者とみられて詮議をかけられて弁明も無視されて改易となつた。藩も文治的体制の達成をめざす上で、溢れ者の一掃に躍起に取り組んでいたことが分かる。

## 二、徳島藩の溢れ者対策

承応期は忠英の初期藩政改革で益田豊後の改易を始め譜代家老層が後退し、代つて長谷川越前の台頭が象徴する官僚体制の構築で、新たな段階を迎え、ついで三代光隆の文治支配の基礎が固められると、村瀬のように父の徳兵衛が武芸により無足諸奉行から百石取りの士分に出世するような道は閉ざされた。銀左衛門はそんな閉塞状況下に不満を鬱積させて溢れ者となつたと考えられる。それに対して藩は溢れ者取締りの御触書を多発する。例えば寛永九年(一六三二)二月に忠鎮(忠英)名で「面々召連候下々高声或小歌、じやうるり、たはこ給候事停止二候、尚下横目申付候間、其義堅相守候様可申付事」と命じ、また承応二年(一六五三)二月の定でも

一面々召連若党・小者二至迄、立髪・大ひけ停止之事

一 小者絹布之類身二当義停止之事

一刀式尺八寸より長キは停止之事

一 脇指壹尺八寸より長キは停止之事

一 色さや・かいらき鞆、付、若党目二立程之大脇指停止之事<sup>①</sup>

このように城下の溢れ者の横行には、幕府の旗本奴対策と同様に苦慮していたであろう。これら城下の溢れ者は江戸の旗本奴の風俗に気触れた所業であつて、藩は取締りの重点を旗本奴風の禁止において、流行の蔓延を防止しようとしている。しかし、溢れ者取締りは目付配下の少数で輕輩の職であつたため、どうしても限界があつた。そのため翌承応三年には仕置家老賀嶋主水と長谷川越前が連名で、次の停止令を出している。

#### 覚

一 弓鉄炮之者、船頭並家中歩、若党下々至迄、刀式尺七寸、脇指

壹尺八寸迄可指事

(中略)

一 立髪・下ひけ停止之事

一 朱さや・黄うるし・かいらき鞆停止事

一 侍中右類定置上は、又若党、又町人以下、雖不及言、弥可相守、

下女・小者二至てハ絹布之帶迄制禁事

右条々若違背之者於有之、見付次第可剥取之者也<sup>②</sup>

承応三年六月朔日 賀島 主水

長谷川越前

取締り基準をより具体化したこの覚書で、どれほど取締りに効果を挙げたかについては定かでない。

以上のように藩の溢れ者対策に腐心している状況から考えると、近世初期の徳島城下において支配秩序を混乱させ、藩中枢を困惑させる元凶は溢れ者という一部の武家の行動であることは明らかで、それは藩機構内部の矛盾が露呈した現象であり、何を措いても早期の解決を必要とする政治的課題であつた。しかし、城下ではその後も暫くの間は、溢れ現象は絶えず、日常的に市中で町屋で理不尽な振舞いは止まなかつたことは、次の史料でも知られる

#### 覚

一 於当市売買之砌不依上下奉公人対町人理不尽之申懸出入之打擲は可為曲事但依科之趣可遂穿鑿之事

一 自国之侍之義は不及云に對他客町人慮外成躰於仕は可為曲事

(中略)

一直人並又若党以下市中へ罷出諸事猥族可為曲事横目不候条常々可相守其旨事

右定々若違乱之輩於有之は速忽可処罪科者也

万治三年十月廿一日<sup>③</sup>

(御在判)

この万治三年(一六六〇)の史料で、初めて城下の円滑な商業活動の發展を妨げる要因として、溢れ者の横暴を挙げざるを得ない藩の立場を明確化した意義は大きい。それでも町横目だけに取締りを担わせるのは苛酷であり、それについては『異事旧記』にも具体的記述<sup>④</sup>があつて、その実態を知ることができるが、本来町方の安全を守ることが

本務である町奉行に溢れ者取締りの権限はなく、そこにも城下経営の矛盾がみられる。こうして取締りの最前線に投入される町横目を制度上支配するのは目付であるが、家臣の監察機能をもつ目付の役儀を「将卒役令」では、「御目付の役は御家風儀の善悪御作法の正と不正と諸役人の勤方の善悪等治乱共是を見聞して御大将へ申上るなり賞罰御政道の本となる故濂直して信実ある人を撰み被成一切上の御目の不屈所へ是を被遣也<sup>15</sup>」とあるように、家臣の言動を監視し諸役勤方に違背の事実を見聞すれば御大将、つまり仕置家老に上申し裁断を待つことが本務である。そのため目付は取締りに直接関わることなく、町横目は仕置家老から直接に取締りを指示されていた。そのことも制度上の矛盾であって、現実の取締りを困難にしていたものと考えられる。

いずれにしても、初期藩政下における徳島城下の秩序を混乱させる原因のうちでも、溢れ者の横行に藩は手を焼いていたことは否定できない。それでも少数の町横目による取締りを継続することによって、延宝期になると城下から殆んど溢れ者は姿を消したことを『異事旧記』は伝えている。例えば朋輩の林兵衛に手疵を負わした土方与一兵衛は切腹、町横目数人を斬った高井五郎太夫も切腹というように、藩の処罰も厳しさを増し、助任橋の擬宝珠を外したり溢れの限りをつくした熊谷馬左衛門の切腹を機として「其後溢自然と相止申候<sup>16</sup>」と記されていることに注目しておきたい。それを契機として藩による異事対策は強化が図られ、「殊二元禄年中御改有之穢多ノ末下ニ御付ナサレ候由<sup>17</sup>」という事後処理の仕方までみられるようになる。

後述を予定している城下盆踊りの寛文規制は、盆の三日間は家臣に

禁足を命じている。藩によるそのような措置も明らかに溢れ者対策として出されたものと考えられることができるだろう。なお溢れ者が流行した背景としての寛永・延宝期の藩情の特徴を概観してみよう。

### 三、近代初期の藩情

天正・慶長期徳島藩の支配体制を象徴したのが阿波九城制であった<sup>18</sup>。もちろん藩内外の軍事的緊張に対応するため蜂須賀家政は、入部直後に領内九か所の要地に支城を設け、それぞれ譜代の老臣に三百宛の士卒を預けて城番に任じ、近世化に反対する土豪一揆に備え、外敵の侵入を阻止するとともに管轄区域の地方支配をも担わせたので、城番は郡代の役儀をも兼ねていた。これは藩内分権体制であり支藩的存在であった。ところが慶長十五年（一六一五）大坂夏の陣で豊臣家が滅亡したことを機に江戸幕府は諸大名に対して一国一城令を出し、支城の撤廃を命じたので徳島藩でも九城を廃し、各城下に駐留させていた兵員を順次徳島城下に移住させることになった。約三千に近い家臣を引揚させるためには、城下町の拡張と整備の必要が生じ、都市再開発の巨大なプロジェクトの実施に着手することになるが、そのことは在来の地方分権支配機構を解体し、一元化された藩政機構に再編し権力を領主に集中する絶好の機会でもあった。こうして二代藩主忠英は初期藩政改革を精力的にすすめる、在来の軍事優先の機構から経済重視の体制に転換することをめざした。

こうして忠英は初期藩政改革に着手したが、九城の廃止と関連して

臨戦体制下に活躍した多くの老臣を藩中枢から退け、新たな藩政に適應できる有能な人材で中枢を固めるため、まず筆頭頭家老の稲田修理の知行地であった美馬郡の半分を上知させ、その分を淡路国に分知したうえ洲本城代という閑職に甘んじさせた。もともと悲劇的であったのは海部郡の軀城番である益田豊後長行で、忠英が各城番に代えて地方支配を担当させるために設けた国奉行によって、長行が海部川流域の良材を無断で伐採して江戸に回漕し、私服を肥やしたことや、郡内での苛政も発覚して城番を剥奪された。これに対して長行は藩が法外の大船を建造し、切支丹の取締りに手心を加えているなどとして公儀に訴えたため、老中は長行と改革の中心として活躍する長谷川伊豆を対決させた。その結果長谷川の主張を認め、長行の処分を忠英に委せたので、長行父子は切腹させられ、厳しい改易処分が断行された。この事件を海部騒動と称し、蜂須賀家はやつと存亡の危機を脱した。また大西城（三好郡池田町）の城番中村美作も発狂した<sup>(20)</sup>として改易されている。それに対して仕置家老となった賀島主水（牛岐城番）、山田豊前（仁宇城番）と長谷川越前は、ともに藩官僚機構の頂点に据えられた。とくに越前の子伊豆は忠英の信任篤く初期改革を主導するが、阿波郡の原野を開発するため原土制度<sup>(21)</sup>の創設を具申して実現するなど、新たなタイプの官僚の活躍を印象づけている。こうした新旧勢力の劇的交替は、当然のように溢れ者を輩出させる原因となった。

また初期改革は地方支配の再編をめざしたが、そのためには農村と農民の実態を正確に捉えることを前提とする。そこで阿波の明暦・万治期の棟付改めや、寛文・延宝期の藩全域の棟付改めも実施された。

それを機に水田化できない吉野川流域農村の藍作に注目し、保護と奨励も本格化している。こうして藍は既に開発されていた撫養塩田（鳴門市）の塩とともに諸国の市場に販路を拡大しつつあったし、また藩はその流通過程に介入して藍財政確立の一環に繰り込むことに意欲を燃やしていた。こうして藍の藩外市場拡大がすすむと、どうしても生産地の藍玉を集散できる藩内市場の形成を不可避とし、郷村部の藍商の多くが徳島城下に藍店を構えた。また藍の栽培には大量の金肥投下を必要とするため、肥料商の城下進出も目立つようになった。寛永期以降はこうして藍業の発展を背景に、除々に新町川畔は藍玉の集散地を形成する。それは当然のように藍店や肥料店で働く奉公人層も城下に移り住むようになると、町屋の空地に裏長屋も建ち込んで城下の景観も社会構造も大きく変化を遂げていった。このような町屋の活況に反し寛文期の藩財政は窮迫し、家臣も知行の借上などによって窮乏に喘いだ。初期改革に不満を抱き溢れ者となって市中を横行する若い武家が輩出しても当然であったと考えられる。もとより藩財政を窮乏させた直接の原因は、寛永五年（一六二八）の大坂城手伝普請の出費や徳島城下の再開発に伴う富田や佐古を主とする侍町の建設に要した財政支出の激増などによるものであった。

城下における溢れ者の流行は、まさに以上のような複雑な背景を反映する現象であったが、長谷川伊豆を中心とする初期改革は除々に成果を挙げていったが、その改革に追い風となったのが延宝期に始まったとされる全国的な衣料革命であり、木綿の染料に最適である藍の需要の急増であった。こうした経済状況の好転を背景に徳島藩の支配体

制もほぼ確立するが、その過程において城下に荒れ狂った溢れ者の横行も姿を消したとされている。<sup>(25)</sup>

#### 四、初期城下の溢れ者現象

十七世紀後半の城下では、『異事旧記』によると武家同士の喧嘩沙汰が合計七三件中の一九件で二六〇を占めている。事例別に分類すると次表のようになる。次いで家来を手討にした一七件、町人を無礼討ちとした一一件と続き、明らかに溢れ行為と断定することができるのは四件である。しかし、格別危害は加えないが市中を横行する溢れ者は多かったものと考えられる。なお全体七三例のその他の二例は分類不可能のため表から除いておいた。そこで事例の多いものについて整理することにした。

##### (一) 喧嘩

青山五郎太夫と尾崎勘左衛門の場合には、「或時五郎太夫用事合含、指急他行之節、勘左衛門途中二而目礼候得共、五郎太夫見損し過行け

事例	件数
喧嘩	19
家来手討	17
無礼討	11
溢れ行為	4
男色	2
てぶらかし	1
不義成敗	1
その他	18
計	73

れハ、勘左衛門咎申ハ、士之礼を致す二何の請もなきハ別心有やと即時二拔放けれハ、五郎太夫も拔放し、終に五郎太夫仕負相果候」という事件で、藩は勘左衛

門の所業を「短慮之仕合之由御咎有り、一心院二而切腹被仰付候」とし、また土方与一兵衛と林兵藏の喧嘩は「土方与一兵衛・林兵藏・林源左衛門・青山助左衛門同役にて、南北宗門御改奉行相勤罷歸り候而、助左衛門宅二而右大帳面四人相集て相改る処、与一兵衛と兵藏存寄論候処、郡手代某申ハ、与一兵衛様被仰通之筋宣敷御座候と、与一兵衛を引、兵藏を落し候へハ、其俣拔打ニ郡手代を切止メ、与一兵衛二切懸る、与一兵衛も拔合せ、相互二疵を請せる」その後与一兵衛はその疵で、「外科申ハ、何分御手足御不自由ニ候半と有之けれハ、然る上ハ生候甲斐なきとて食を絶チ、扱又努て縫疵を疵メ、終に相果候因茲兵藏も切腹被仰付候」と処理している。<sup>(27)</sup>

また手塚源七と清須平六の喧嘩は「平素心易く近所之事なれハ、源七方二而囲碁相催有けるか、盤上二而鬭論起り、互二及刃傷、双方共手負、平六を切留候、源七ハ追而上方被仰出候ハ、軍意盤上ハ博奕ニ相準シ、御鷹匠役とハ申ながら、御歩行格之者なれハ、有間敷義として日影者ながら源七も光仙寺二て切腹被仰付候」と記している。<sup>(28)</sup>

次に町横目の取締りの役務がどれほど困難で危険を伴うものであったか、『異事旧記』の春日祭礼のとき高井五郎太夫が町横目の多くを殺傷した記事に注目すると、「寺町春日祭礼之夜宮之節、社二て町人共多く相集り、音頭を諷して罷在候節、素方神社仏閣二て右様放埒之義御法度二て候へハ、町目付之者相咎候へハ、町人共連台を飛下り皆々逃申候、五郎太夫ハ諸士之事、身二無覚候へハ、其俣罷在候処、町目付之者相誤五郎太夫元棒を出しければ、無撓拔放し最初棒を出たる者を切手を切落し、右二付追々相懸り候者、社の上方口に罷在候而、



五六人も切殺し、自分二も手疵多負候由段々役人相重り、戸板二載願成寺へ引取、其後追而切腹被仰付候由也<sup>29</sup>とし、続いて「町目付ノ者、即時切ラレ候者、并二手疵蒙候者ハ、跡式下シ置レ、無疵者ハ御潰シ仰付ラレ候由<sup>30</sup>」という理不尽な後始末をしている。

以上の事例でも分かるように、尾崎勘左衛門が武士の札を欠いだとして青山五郎太夫に斬りつける暴挙、林兵蔵が郡手代の言行に対する偏見、囲碁上の口論から刀を抜いた手塚源七の行動、町横目の疑いに弁明もせず多くの町横目を殺傷した高井五郎太夫の挙動などは、いずれも戦国の遺風が城下の平和な秩序を混乱させる異常な風俗として、それが溢れ者の横行を支える武家社会の悪習となっていたものと考えられる。

## (二) 家来手討ち

家来を手討ちにするという事例も喧嘩に次いで多発している。まず松崎隼之助の若党手討ちについては、「隼之助方へ何某方より若党二手紙為持指越候処、右返事呼出し相渡候半に隼之助玄関へ出候へは、右若党隼之助下女と密々物語いたし、勝手之方へ廻り候へは、早速隼之助方提出、二人共致手討、右主人方へ此由相達、其外有来届にて相済候よし<sup>31</sup>」この隼之助の有無も聞かずに手討ちとした行為に對して藩は何の詮議もせず、落着するというのが当時の武家の身分上の優位性を示している。また乾一郎兵衛の家来手討ちの場合は、「市郎兵衛舟二而、南方千代丸へ遣遥二、拝知狩出之家頼召連罷出候処、右家頼不埒有之難致其俣事有之致成敗、右構之在所庄屋遠方故届の程如何と存居申処へ、今枝庄次郎是も舟二而此辺へ罷越候へハ、市郎兵衛斯之通

相語候へハ、家頼之事届にも及間敷候間、死骸徳島へ乗帰可申とて、則庄次郎舟に乗出来嶋市郎兵衛屋敷まで帰候而、其通御届にて相済候よし<sup>31</sup>」と記している。このような拝知召出しの家来は、明暦・万治期の棟付改めによって駆出奉公人の身分に固定され、給人の屋敷に奉公する間は「小者」として召使い、村の庄屋支配から外されていた。この小者の不埒な行為については一切知ることができないが、無礼な行為と主人が判断すれば手討ちにすることが特権として認められていたことは明らかである。

## (三) その他

家来手討ちに対して百姓を無礼討ちにした三淵重内は罪を得ている。それは「重内ハ西塚村居住の処、右在処之百姓物を荷ひ暇道通候節、重内へ致慮外手討二仕候、則玄陸(兄)方より御届申上候得ハ御聞届成候、然共右在所相住平生百姓存知之者之事如何ニ思召、重内義此後ハ不徘徊様ニ被仰渡候、其後又二軒屋町ニ而何者候哉、玄陸同道の節、重内致成敗、其旨申上候所、玄陸暫憚被仰付候、重内ハ御追放被仰付候<sup>32</sup>」と記されているように、重内は二人も殺害しているにも拘らず追放となり、玄陸は弟の行為を阻止しなかったというので暫く憚りという軽い処分で終っている。それでも家来討ちよりは重科となっていることに注目しておきたい。

さらに林吉右衛門は諏訪社の祭礼の夜宮に「大谷へ相撲見物ニ参り候処、平生権兵吉右衛門に意趣も有之哉、吉右衛門を後方刀脇指共抱へ、待二ても斯致候へハ如何成候哉と手込二いたし候へハ、少々緩ミ

候時、脇指抜き権兵衛を刺候て、畳懸て権兵衛を切留メ、御届二而、昨夜多田源右衛門方へ用事二参候所、道筋二而斯之通之慮外故成敗仕候由申上候得ハ、成敗之段ハ御聞届被成候、然共御制禁の夜相撲へ参候段御咎有之、暫憚被仰付候と、町人の人命を奪つたことより、藩の禁令を破つた夜相撲見物を重視した藩の判断に注目させられる。もう一例を挙げると、「星合彦太郎ハ星合茂右衛門弟二而、格別二御歩行被召出罷在候、平生大工八郎兵衛意趣有之候所、彦太郎折節市中銭湯へ罷越候、八郎兵衛も一処に集合、致如何候哉、彦太郎を発と取て投候得ハ、立上り、其俣八郎兵衛致成敗、有来通御届二而相済候旨、然共銭湯へ参候由如何二思召、当時相憚候由」とある。家臣の銭湯入浴は禁じられていた。多分八郎兵衛はそれを知つていて意趣晴らしをした、彦太郎は違法の発覚を恐れて斬りつけられるとは思つていなかったであろう。藩はここでも無礼討ちを許しているが、銭湯に行くのは違法として服罪させている。

『異事旧記』には「溢れ者」を二例しか挙げていないが、城下には多くの「溢れ者」が横行していたことは、その記事から読み取ることができる。「溢れ者」の行動に代表されるように、初期藩政改革が新たな藩体制の確立に向かう過程においても、多くの家臣の中には問題や感情の対立を生じると、それを刀によつて解決しようとする戦国的観念を転換できない武家がいても当然であつた。『旧記』に挙げている大半の事例が、悲惨な家来手討ちや無礼討ちを多発させていると考えられるであらうし、城下における古いタイプから脱することのできない武士たちの行動は、「溢れ者」を輩出する社会的背景であつたこ

とは否定できないであらう。

徳島城下を闊歩し藩政の新たな展開や文化に反発すること、旗本奴などの歌舞伎者といわれていた風潮に憧れ、ファッショナブルな異形の行動による自己主張、そうすることが何の政治的な力にもならないことを知りつつも、異軀を誇示しつづけて存在を認めさせたいというのが「溢れ者」であるとするれば、藩にとつてそれほど警戒すべきものではなかつたが、それが家臣団内部の秩序を乱し、また藩による城下町、とくに町屋の商業活動を大きく発展させようとする延宝期以降になると、その「溢れ者」対策も厳しさを増すのは当然であつた。こうして「溢れ者」に対しても、また多発していた武家による殺伐な異常と思える行為についても、十七世紀末には減少し、とくに溢現象は城下から姿を消したことは『異事旧記』によつて確認することができる。元禄期には取締りの制度が改められ第二節で述べたように「穢多ノ末下ニ御付ナサレ候由」とするほどの厳科で臨むようになったことは注目しておくなくてはならないであらう。

以上のように徳島城下にかなりの混乱をもたらした「溢れ者」は、明らかに近世初期における藩政転換期の申し子であると考えることができ、決して徳島藩における特異な現象であるとは考えられない。岡山藩や会津藩にも類似の現象が史料によつて確認できるといわれているが、それらと比較しつつ考察することを課題としたいと思つている。先述したように徳島城下の「溢れ者」は、明らかに初期藩政改革のアウトサイダーとして存在したものである。それは江戸の旗本奴風に似寄せた風俗を城下に流行させるものであつたが、もとより新たな藩政

に即応できず、また拒否した若い家臣たちの行動であつたので、藩にとつても放置できるものではなかつたであらう。しかし、その対策が本格化するのには、その背景に決定的な理由がなくてはならないが、その解明は今後の課題としたい。

## 五、徳島城下盆踊りの武家禁足令の検討

徳島城下で毎年の盂蘭盆を盛り上げた盆踊りは、多分踊りが始まつた寛永中期から寛文期までは、当然武家も踊りを楽しんでゐた。この盆踊史料の初出は明暦三年（一六五七）のもので、その末尾に踊りは七月十四日から十六日の三日間に限ることと、この前後に踊ることを原則的に禁じているのみで、踊り取締りには一切触れていない。史料の大半は日常的に諸士や若党・小者などの風俗の悪化に対して、仕置家老山田豊前が町横目に取締りを命じたもので、明らかに溢れ者の横行を取締まる内容となつてゐる。

当時の城下では溢れ者の動向が目立っていたものと考えられるが、盆踊りに対する領主規制はされていなかったため、武家たちは帯刀の姿で踊りに加わることができたと考えられる。そのため武家同士の間にトラブルを生じ、礼を失したとか刀の鞘が当たったとか、些細なことで斬りかかり、相手もそれに応じるような、危険な喧嘩口論沙汰も頻発したことは、『異事旧記』からも考えることができよう。もちろん町人に対する無礼討ちとか、また忍傷事件を取締る町横目に斬りかかるなどの溢行為も多発した。最初の盆踊規制は寛文十一年（一六七

一）に出た。「侍中屋敷ニて踊之義盆三日間不苦、尤門をもち喧嘩口論無之様可有之事<sup>36</sup>」という武家に禁足を命じたところに特徴がみられる。慶安・寛文期は溢行為がもつとも城下で目立つた段階であるが、たとえば「昨晚御弓之者小出尾左衛門宅ニ而子供寄合踊有之候処、私二男之件も罷越共二踊候処、御弓之者山内吉兵衛伴二男後方突懸候旨ニ而慮外之段相咎及喧嘩、依之手討ニ可仕と切付候処、居合之者共取留、双方取分、相隔候故、存寄難相違、大勢同道ニ而罷帰申<sup>37</sup>」などと『旧記』に記してゐるように、武家の踊りにはこのような喧嘩沙汰が絶えなかつたのであらう。こうして城下の盆踊りに対する領主規制は、まず武家の喧嘩口論を根絶することから始めなくてはならなかつたと考えることができる。

以上で、分かるように藩の近世初期における城下盆踊対策は、「溢れ者」を始めとする武家の行動を対象としたものである。それに対して町方に対する取締りは、各町組ごとに大年寄、各町は町年寄と五人組の自主規制に委ねることを原則とし、それを町奉行は統轄するが、余ほどの混乱が生じなければ、同心や日明を差向けなかつた。しかし、盆踊りは貞享期のころから大規模化し、一丁廻りと称する掛け踊りが大流行するようになる。そこで貞享二年（一六八五）の領主規制が出たのであるが、それでも町奉行が直接に取締るということは避け続けた。そこには盆踊りを城下の賑わいを演出するための大切なイベントと位置づけ、その経済効果に期待していたことが理解できる。

こうして取締りの責任を担った町役人や各町の願人は、自主的取締りの効果を挙げようと警固人を雇い入れ、不法行為に十分に備えた。

このような体制で取締りに当り、悪質な者は召捕って説諭するだけで内済とすることが慣習化していた。また町組で取締りが困難なときには、御山下二十一か村から補助要員を要請することになっていた。これについて「藩政時代行政司法の状態」には、「名東郡下助任、上助任、田宮、佐古、藏本、矢三、今切、島田、庄、東名東、西名東、下八万、北浜、富田、南斎田津田、新浜、沖須、住吉島を御山下廿一ヶ村といふ、徳島城山下の村落の意なり、是等徳島に接近する村落に在りては、隱便、盆踊り其他市内の雑踏する事ある時は、郡代所よりの命に応じ非常を出役警戒せしむるの義務あり、尤も之れは村の務めなるを以て其出役には村より与内金を贈遣する定めなり」ということ<sup>(38)</sup>で十分な警備体制を整えることができたのである。そのように町奉行の要請で郡奉行が各村役人に出役を命じると、そのための諸経費は各村ごとに出演人数に応じて与内金、つまり村入用から支出したので、町方では願ってもない制度であった。それでも盆踊りは城下一帯の町屋が人で埋まり、浮き立つ状況下では、喧嘩口論や禁じられた異昧の踊りも絶えなかった。それでも町組による自主的取締りは機能し得ていたのであろう。

また寛文の禁足令を無視した武家の踊り込みや、自分を隠した踊見物<sup>(39)</sup>も絶えることがなかった。しかし、立錫の余地もないといわれる市中で、武家を見分けることなど、少数の町横目では不可能であった。

また見分けたとしても雑踏の中で棒を振り廻すこともできず、もちろん召捕ることなど決してできなかったであろう。そうした盆踊りの中で武家召捕の唯一の事例として、天保十一年(一八四〇)の蜂須賀直

孝の一件があるだけである。

他に注目すべき家臣たちの禁足令を無視する早俄が、商家の酒宴の席などに招致されて興行するなど、著しいはみだし行為が、安永から文化期の史料<sup>(40)</sup>でみられる。その背景にはやはり藩財政の窮迫に伴う家臣の窮乏という経済問題が介在している。本稿で分析対象とした溢れ者の横行が藩政初期における溢現象とすれば、安永期以降におけるこれらのはみだした行動は、後期溢現象だと考えることができるであろう。いずれにしても徳島城下における家臣の溢現象が目立つようになるのは、明らかに政治や経済はもとより、都市文化の過渡的段階において表出する社会現象であると意義づけることができるであろう。そのように結論づけることができるとすれば、こうした溢現象が城下の盆踊りと深く関わって表出している後期の現象の発端は、既に初期においてもみられたものと考えられ、藩としてはその対策に迫られていたはずである。そうした過程において寛文十一年の禁足令が出され、城下の盆踊りから家臣を隔離せざるを得なかったと考えるべきであろう。こうして寛文規制は明らかに溢れ者対策であったといえるのではないだろうか。

## おわりに

本稿は初期徳島城下の秩序を混乱させた溢れ者が、どのような背景の下に発生し藩はその対策にどれほど苦慮したか、またなぜ十七世紀末期に城下から姿を消したかについて、できるだけ歴史的事実を明ら

かにしようとした。そこから溢現象と深く関わると思われる盆踊りに、武家に禁足を強制した寛文規制が出された必然性にも言及しておいた。とくに寛文禁足令が出された理由については、従来の解釈では城下盆踊りに対する領主規制の初出史料とするだけで、溢れ者対策としての側面については一向に考慮されることがなかった。その意味で本稿は一定の前進をしたものと自認している。

また、徳島藩の初期藩政改革については、石躍胤央<sup>(1)</sup>のすぐれた先行研究があるが、海部騒動など藩中枢の世代交替が家臣各層にどのように影響したかなどについての研究も皆無の状況にある。さらに城下の人びとが初期改革からどう影響させられたかなど、重要な課題は未解決のまま放置されているといっても過言でない。そんな状況に少しでも風穴を開けてみようとする試みが、溢れ者について取り上げた理由であるが、本稿では溢れ者の存在そのものと、溢れ現象を誘発する寛文期前後の武家の動向、および藩の対策について触れることに終始するようにしてしまった。つまり、徳島城下における社会構造の変質や藩の地方支配体制の整備などといった、都市史や藩の農政史なども視野に入れた考察の必要性を感じながらも、そこまで研究の枠組みを広げることができなかった。それは今後の課題として取り組まなくてはならないと思っている。

さて、城下における溢れ現象の多発について、長期的スパンで考察するとき、藩政確立過程の寛文・延宝期の家臣団の中に江戸でみられた旗本奴などの傾奇現象という、異常な武家風俗が徳島城下に伝播し、流行したことについては他の諸藩の事例とも比較検討することが

不可欠であることを認識しているが、徳島藩の場合に限定して考えれば、『異事旧記』にも記しているように、たとえば熊谷馬左衛門の所業に対して切腹を命じた藩の決断を契機として、延宝期に入ると溢現象は自然に目立つことがなくなったと記している。その後に元禄を経て城下の社会構成も急変し、とくに裏長屋に住む下層町人は、享保期になって経済不振を背景として、武家に対する反抗的な行動が顕著にみられるようになる。これは享保期の藩法令によって確認できることであるが、これは初期城下における武家による溢現象の町人社会への転移と考えることができるのか、まったくその背景を異にして発生した現象であるかについては、いずれ考察しなくてはならない重要課題である。

最後に宝暦から寛政に至る中期の藩政改革が相次ぐ過程で、若い武家を中心とする早俄の興行が集中的に表現している新たな動向は、ある意味におえて武家の町人化現象と考えることができるもので、それを藩政中期における溢現象と規定することもできるであろうし、さらに藩が危機的段階を迎えた天保・弘化期になると、城下町人の異様な風俗や藩の禁令を無視する武家の行動が目立つようになってくる。これも幕藩制後期における溢現象として捉えなくてはならないだろう。

そのように考えると、溢現象というものは藩政の諸画期ごとに多発する現象であると考えることができるであろう。しかも、各段階における溢現象が集中的に発生するのが城下における盆踊りの三日間であったことは明らかである。そうした意味において藩政改革と盆踊り、

盆踊りと溢れ者の動向、それに対する領主規制のあり方を、それぞれ関連づけた研究を深化させることは、今後における緊急の課題であるが、そのためには新たな史料の掘り起こしという、もともと困難な課題に挑戦することを前提としなくてはならない。なお他藩との比較などについて、竹下喜久男先生から、重要なご指導を賜ったにも拘らず、手がつけれなかった。それについても今後の課題とすることとしたと考えている。

〔註〕

- (1) 慶長二十年以来、元和三年・寛永六年・同十二年・寛文三年から天和・宝永・享保二年まで出され、一国一城令に関して慶長の規定は「諸国居城雖為修補、必可言上、況新儀之構營堅令停止事」とし、さらに「城過百雉、国之害也、峻畧浚隄、大乱本也」と但書されている。元和法度では「新義之城郭構營堅禁止之、居城之隄堊石壁以下破壊之時、達奉行所、可受其旨也、櫓塀門等之分者、如先規可修補事」と修正され、寛永六年法度で慶長法度に復し、同十二年法度もそれを踏襲している。慶長二十年七月の武家諸法度に先立って閏六月十三日付で酒井忠世・土井利勝・安藤重信らの年寄衆連署で出された奉書で、主として畿内から九州までの西国大名を対象としたもの。数日の間に四百ほどの城が破却されたという。しかし、城は廃棄してもその城下に駐留する兵員を大名の居城周辺に移すことは容易でなかった。

- (2) 『徳川実記』第四卷(新訂増補国史大系41・吉川弘文館刊)によると、『寛文四年三月七日。このたび万石の例に領地の御朱印賜はるをもて。けふ触らるゝは、歴世の御朱印印藏するともがらは、御朱印ならびに

写しを添て呈すべし。尤国郡郷村并に蔵入を簿冊にしるして出すべし。御朱印蔵せざるともがらは。国郡郷村并に元禄額をつばらに注記すべし。御朱印の外に加恩給はり。あるは御朱印蔵すれども転封ありしは。其事つぶさにしるして。小笠原山城守長矩。永井伊賀守尚庸がもとに出し。其他わきがたきことあらば。これも兩人にこれはかるべしとなり。(中略) 四月廿八日(中略) 松平越後守光隆。松平新太郎光政。松平大膳大夫綱広。森内記長継に封地の御判物給ひ。中川山城守久清。小出大和守吉英。秋月佐渡守種信。土方備中守雄豊。青木甲斐守重兼。建部丹波守政長おなじく御朱印をたまふ。○廿九日(中略) 松平相摸守光伸。松平阿波守光隆。松平但馬守直良に御判物。稲葉能登守信通はじめ七大名に朱印状を与えている。こうして同年六月三日に終了しているが、十萬石以上で侍従以上の大名には御判物を、それ以下の諸大名には御朱印状を出し、その後は將軍の代替りごとに同様の手続きが行われることになり、將軍による大名支配の体制が確立されることになるという意味で、歴史的意義は大きかった。

- (3) 慶安二年(一六五一)に由井正雪や丸橋忠弥などを中心とする浪人らが、江戸幕府の転覆をはかった事件で、事前に計画は発覚し正雪は切腹したのを始め浪人らは処断されたが、幕府はこの事件を契機に浪人対策に取り組み、幕藩体制は安定することになった。

- (4) この年二月の七か条の定の末尾に「面々召連候下々高声或小歌・じやうり・たはこ給候事停止二候、尚下横目申付候間、其義堅相守候様可申付事」と忠鎮(忠英)から直接命じている(『藩法集』③徳島藩)六頁所収。

- (5) 小杉樞郎編『阿波国徴古雜抄』(日本歴史地理学会・一九一三年刊)一一三〜一一八四頁所収。

- (6) 前掲書『阿波国徴古雜抄』一一六三〜四頁所収。

- (7) 徳島藩では城下町のことを御山下と表記することが多い。
- (8) 前掲『阿波国徴古雜抄』一一六頁所収。
- (9) 右同書、一一六四頁所収。
- (10) 註(9)と同じ史料。
- (11) 藩法研究会編『藩法集③徳島藩』(創文社・一九五二年刊)七頁所収。
- (12) 右同書、九頁所収。
- (13) 徳島県編『御大典記念阿波藩民政資料』上巻(徳島県・一九一六年刊)七四九〜七五〇頁所収。
- (14) 前掲『阿波国徴古雜抄』一一四八頁所収。
- (15) 前掲『御大典記念阿波藩民政資料』上巻、三六二頁所収。
- (16) 前掲『藩法集③徳島藩』所収史料のうち明暦三年、寛文十一年の町横目に宛てられた仕置家老山田豊前が発給したり取締りを指示した定書に注目したい。
- (17) 前掲『阿波国徴古雜抄』一一四七頁所収。
- (18) 『阿淡年表秘録』(『徳島県史料』第一巻所収)によると、天正十三年(一五八五)に蜂須賀家政は阿波九城制を布き「名東郡一宮城益田宮内少輔、那賀郡牛岐城(今富岡ト云)細山帯刀政慶(后賀島主水と改)、同郡仁宇山城山田織部佐宗登、海部郡鞆城(五千石)中村右近大夫重友(始大多和長右衛門正之、御城番被仰付高三千余石之御代官役被仰付)、板野郡撫養(町)湊城益田内膳正正忠、同郡西条ノ城森監物某、麻植郡川島(五千五百石)林図書助能勝、美馬郡脇城稲田左馬允植元、三好池田城牛田掃部助(初柳原又右衛門)、右御城番追々被仰付各兵士三百宛被付之、右御城主之面々へ従秀吉公御小袖式充被下之」とあり、同年末には「仁宇山城、海部郡鞆城、撫養ノ湊ノ城、板野郡西条城、麻植郡川島城、右為御要害追々経営被仰付」とある。
- (19) 海部郡鞆城番の益田長行は稲田氏の洲本城代転出に危機感を募らせ、
- 先手をうって海部郡を蜂須賀家から分藩し一藩を立てようと、江戸家老の立場を利用して幕閣に運動を始め、その資金を得るため海部郡内の良材を無断で伐採し、江戸に廻送していたことや、郡内での税政が国奉行の調査によって発覚し、寛永十年(一六三三)長行父子は改易のうえ幽閉された。その後正保二年(一六四五)に長行の義弟阿彦左馬之丞が蜂須賀家の法度違反を公儀に告発したため、老中は長行と長谷川伊豆を対決させた結果長行は敗訴し、公儀の指示により切腹させられた。
- (20) 『阿淡年表秘録』明暦二年(一六五六)七月に「中村美作淡州在番中、京大坂へ行忍遊興其不届之義有之閉門被仰付」と記し、十月五日に「山籠被仰付」となる。
- (21) 賀嶋政重(一五九八〜一六六〇)は政慶の嫡子、寛永四年(一六二七)に政慶が隠居し家督を継いで主水正と称し、仕置家老に列したが、万治三年(一六六〇)光隆の直仕置体制移行に伴い職を免びられ同年死亡。
- (22) 宗重(一五三八〜一六一八)は天正の仁宇谷一揆を鎮定し、そのまま仁宇山城番となる。大坂の陣には牛田一長とともに徳島城の留守役を勤めた。嫡子宗登(？〜一六四四)も城番。孫の宗春(？〜一六五二)は豊前を称し仕置家老として城下町経営に尽力した。
- (23) 貞恒(？〜一六五二)は父貞安を継ぎ仕置家老。寛永二年(一六二五)忠英の母敬台院の不和を仲裁し五百石が増され三千五百石。海部騒動では益田長行と対決して長行に反論し酒井忠勝ら幕閣から「豊筋なき儀申上候条阿波守に下し置かれ候」と判定され藩の危機を救う。慶安三年(一六五〇)には忠英の巡国に従い、阿波郡の原野開発を進言、開発した者を原土に取り立てた。そのとき原土六十人が誕生すると、有時に際し長谷川家が支配する。その後も歴代藩官僚のトップとして

藩政に重きをなした。

- (24) 原野開発の見返りとしてその地を知行として宛行われた在村藩士。有時には長谷川氏の支配下で軍役に従った。原士は阿波郡柿原村(板野郡吉野町)や興崎村(阿波郡市場町)に集中し武芸に励んだ。一揆の鎮定や洪水の復旧工事、諸普請の指導に当たり、参勤交代の警固役も勤めたが、とくに幕末の嘉永六年(一八五三)黒船来航以来は大森・羽田の警固役を勤めたことでよく知られる。

- (25) 前掲書『阿波国徴古雑抄』一一六四頁所収史料には「市中家中共、一時二溢者相止ミ候由」する。

- (26) 右同書、一一三九頁所収。

- (27) 右同書、一一四三頁所収。

- (28) 右同書、一一四五頁所収。

- (29) 右同書、一一四八頁所収。

- (30) 右同書、一一五二頁所収。

- (31) 右同書、一一六〇頁所収。

- (32) 右同書、一一六〇頁所収。

- (33) 右同書、一一六一頁所収。

- (34) 右同書、一一六一頁所収。

- (35) 前掲『藩法集③徳島藩』一〇七〇頁所収。

- (36) 右同書、一〇七〇頁所収。

- (37) 前掲書『阿波国徴古雑抄』一一八一頁所収。

- (38) 前掲『御大典記念阿波藩民政資料』上巻、四五七頁所収。

- (39) 幕末の藩御用商人で新町の町年寄中村利平の回想記『庭の生ひ草』には「徳島町・新倉丁・本丁・寺島(いずれも武家町)などにて、土屋敷の用人衆が踊りの組へ頼み来り、ともに踊り狂ひて芸を尽くす。これを士分の奥方・女中など練塀の物見窓より見物す。されば市中到

るところ踊りのあとより見送るなどは一向あらざるなり」と記しているように、つねに武家に対する禁足令は無視されていたというのが利平の見聞した実情であったといえるだろう。

- (40) 蜂須賀重喜による明和改革と治昭の寛政改革の中間に当たる安永期に、若い家臣が組をつくって商家の宴席などに招かれ、組踊りや衣裳俄を興行する早俄と称する芸能の商品化が武家社会に流行し、藩でもその停止を命じている。この早俄は寛政改革の下では自粛していたが、文化期になると復活し藩では本格的な取締りに乗り出さざるを得なくなった。安永四年(一七七五)には「御家中島々にて頭取之者多組踊又ハ歌舞伎鉢之義相企」(前掲書『藩法集③徳島藩』四七頁所収)とあり、文化十年(一八一三)に前面停止(同書九七頁所収史料)として

- (41) 石躍胤央「阿波藩における益田豊後事件について」(『徳島大学教養部紀要(人文・社会科学)』第三巻・一九七九年)、一九九八年に「藩制成立期の研究」(石躍胤央先生退官記念事業実行委員会刊)に再録された。

(みよし) しょういちろう 四国学院大学非常勤講師

(指導教授) 竹下 喜久男教授

二〇〇一年十月十七日受理